



ますが、今回は無形民俗文化財を中心に調査します。  
すなわち、次の項目があげられます。

- (1)年中行事関係 正月、節供、盆、祭など
- (2)人の一生関係 婚姻、葬送、墓制など
- (3)生産関係 農耕に関する習俗など
- (4)社会生活関係 社交、若者組など

さらに、各地域に残るおトー（お当、お頭、お禱）  
行事の所在調査を考えています。

以上の調査事業について、より専門的知識を発揮し、  
有機的な調査活動を推進していただくために、加古川  
市民俗資料調査団（代表玉岡松一郎氏）に調査事務を  
委託しています。

調査団からの報告によれば、これまでの調査実績と  
して、各町内会あて年中行事の照会、志方町の一部で  
の年中行事や墓制の聞きとり及び実地踏査、さらに各  
地区の正月行事の実地踏査などを済ませております。

この調査は、調査員が各地域を訪問し、具体的な事  
例をその土地の人々から直接お尋ねするという方法を

採用しています。このため、3年間で市内全地域をも  
れなく調査することは物理的に困難ではありますが、  
できるだけ広範囲な調査を実施し、所期の目的を達成  
したく考えています。

年中行事の日時や場所、その内容などを文化課（電  
話23-3845）までお知らせいただければ、調査  
内容が一層充実したものになると思います。

また、民具や生活用具を処分される時、同様にお  
知らせください。現在、郷土資料館（仮称）では民俗  
資料を展示しておりますが、不十分な点を順次補充す  
る計画であります。

なお、調査事務をお願いしている先生方は下記のと  
おりです。調査で訪問いたしたときは、よろしくご協  
力ください。

調査員（順不同、敬称略）

- 玉岡松一郎、龍見 譲、松尾 高安
- 阿部 俊彦、富阪 宏治、山西 絃
- 田下 明光、西尾 正仁

## 須恵器編年の空白解明

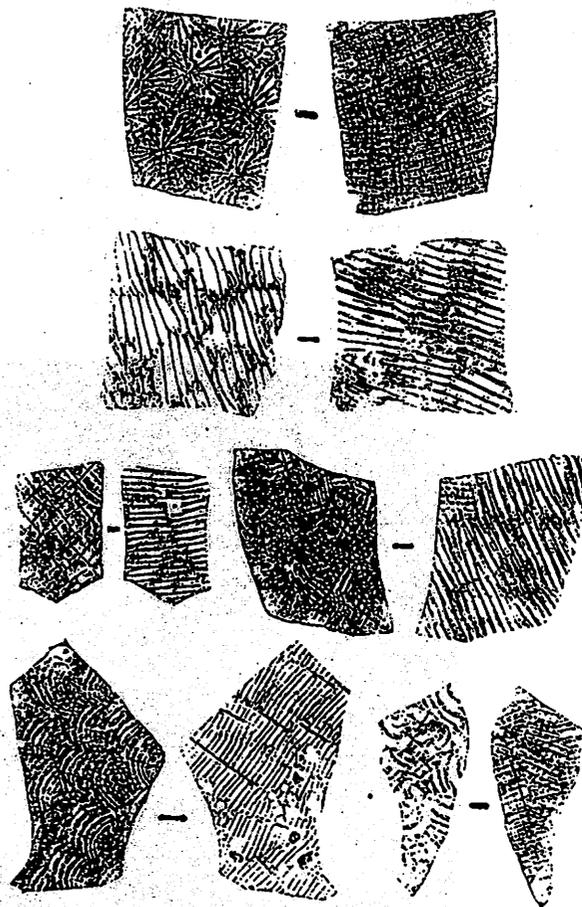
加古川市志方町札馬・大沢所在の窯跡群について、  
3年計画で調査を行なっている。本年は2年次の調査  
として昭和56年11月～翌年1月にかけて実施し、種々  
の成果を得ることができた。ここにその概要を記すこ  
とにしたい。

今回の発掘調査で確認された窯跡は8基あり、この  
結果8～10世紀の須恵器型式編年に重要な寄与するこ  
とが明らかになった。なかでも23号窯は、窯体の全長  
8m床幅15mをはかる登窯で、焚口から奥壁まで良好  
な遺存状態であった。また30号窯は、窯体は全長7m  
床幅1.3mをはかる登窯であり、出土した甕の内外面の  
叩き目文様には注目すべきものがある。

さて札馬古窯跡は2ヵ年の調査を進めるなかで興味  
ある事項が認められた。それは、(1)挿図にも示したよ  
うに甕の叩き目文様が特異であり、奈良時代の都であ  
った平城京へ運ばれていたのが判明した。さらに供給  
地の追究から、大規模な窯業生産の場であったことが  
考えられてくるであろう。(2)水ひしたと思われる精良  
な粘土を用いており、尾張地域でみられる良好な質の  
須恵器と殆んど差を認め難いものがみられる。(3)8～  
10世紀にわたる連続する窯跡の資料の確認により、そ  
の詳細な型式編年が可能となった。

札馬古窯跡群は、奈良時代の須恵器研究に東海地方  
の例に依拠している現状の打開に寄与するものである。

## 札馬古窯跡群 2次発掘調査



甕 叩き目文様 (30号窯)

## 中門・柵列発掘

## 西条廃寺跡 56年度発掘調査

加古川市神野町西条字北山に所在する西条廃寺の発掘調査を、3ヵ年計画で実施している。これは寺院の伽藍配置を明確にし、史跡公園のための資料を得る調査である。

昭和55年度は、瓦積基壇が良く残る塔跡や中門の一部が発出された。そして、法隆寺式伽藍配置をもつ寺院跡であるのが判明した。

昭和56年度の調査は、寺院の主要建物である講堂・金堂の確認、さらに中門の調査を行ない全貌を把握することに務めた。それでは次に判明した事項の概要を記したい。

講堂跡は、その建物基壇が削平されているため認められなかった。しかし、講堂跡南辺の瓦の出土状況から、この建物も塔跡と同様に瓦積基壇であった可能性がある。今回の調査では雨落溝が発出された。雨落溝は幅約1.3mで講堂の四辺に回らしていた。これを基に講堂の規模を推定すると、南北約15m・東西約26mであった。

中門については、八脚門が確認された。八脚門は、本柱の前後に4本ずつの控柱がある門である。門には礎石が使用されず、掘立柱により建てられていた。使用された柱の径は約25cmであった。これを一辺約90cmの方形に掘った穴(掘方)に埋め込んでいた。

この中門に取り付き、主要建物一塔・金堂を囲む廻廊が発出されたのも今年度の成果である。まだ中門に取り付く部分での確認であるが、序々に寺院としての整然とした伽藍構成が把握されてきている。

とくに廻廊で興味深いのは、掘立一本柱の柵列であったことである。柵列の柱間は約2.8mであった。

今回の発掘調査から出土した遺物は、昭和55年度と同様の軒平・軒丸瓦と平・丸瓦であった。また、前回破片で出土した風鐸が、完全な形で出土したのが注目される。風鐸はその断面は菱形をしており、高さ15.4cm一辺5.2cm(底辺)である。

昭和57年度の調査では、金堂・講堂・廻廊部分を中心に西条廃寺の全容を明確にしたいと考えている。



中門・柵列発掘状況

### 文化財講座に参加して

去年の11月16日から今年の1月17日まで5回にわたり、一般市民を対象に開催された文化財講座は大変有意義な催しであった。平素余りこのような催しに接する機会の少ない我々、特に文化財に関心を持つものには有難い講座である。

古代寺院造営の話。中世城郭の話、稲作と関係した年中行事の話、あるいは平城宮跡等の史跡見学会など幅広い講座内容に加えて、各界で活躍される講師諸先生方の多彩な陣容でのご熱心な講義は、ハイレベルであってしかも平易なお話ぶりに時間の過ぎるのを忘れるほどであった。回を重ねて参加する毎に、自ずから文化財に対する認識と愛護の精神が深まってきた。

この講座は1人でも多くの人に参加することに意義があるので、できるだけ大勢の人が参加できるよう配慮されることを希望し、来年度の新企画による開講を心待ちにしています。

上荘町都台 岡 久雄

### 〈東中遺跡発掘調査報告書できる〉

市教育委員会では、昭和55年3月加古川市志方町東中において発掘調査を行ないました。このほどその成果を「東中遺跡発掘調査」報告書として出版しました。

東中遺跡は、内陸部で発見された弥生時代前期のものとしては、県下でも珍しい遺跡です。

弥生時代の溝からはおびただしい土器が出土し、市内3番目の発見となる縄文土器や弥生前期の土器、また完形品を含む弥生中期土器などがあり、今後の加古川市の原始、古代を考えるうえで、欠くことのできない遺跡です。

B5判 106ページ

### 〈郷土資料館のご案内〉

郷土資料館では市内から発掘調査等によりみつかった貴重な資料を展示していますが、利用される方の便宜をはかるため、4月1日より開館日を次のように変更します。お気軽におこしください。

開館日 毎週月曜日～土曜日(祝日及び年末・年始は除く。

(午前10時～午後4時、但し 土曜日は12時まで)

展示資料 (民俗文化財) 日常生活用具・農耕用具・酒造用具・その他の諸職種の用具

約250点

(考古資料) 縄文晩期・弥生時代の土器 石器、木器・古墳時代の鏡 石製品、銅 鉄、鉄器、装身具、埴輪、奈良、平安時代の瓦、須恵器など1300点

場所 郷土資料館(文化課内) 23-3845

### 〈文化財保護説明板を設置〉

文化財保護啓もう活動の一環として毎年、遺跡・石造遺品等に説明板・標柱の設置を行なっていますが、今年も平荘湖古墳群をはじめ説明板24枚、標柱21本を設置しました。ハイキング等にお出かけのときにご覧ください。

### 〈民俗文化財等寄贈者名〉 (敬称略)

梶谷五二	野口町長砂
樽本芳	加古川町西本町
山本澄男	尾上町安田
岡谷敏子	名古屋市昭和区
形木原忠彰	加古川町河原
山本禎一	加古川町本町
安東達夫	加古川町篠原町
菊川綾子	加古川町中津

### 頒布図書

文化財調査報告書	印南野2	1,000円
〃	中山	1,000円
〃	岸	200円
〃	広尾東	500円
〃	山ノ上	200円
〃	札馬Ⅲ	300円
〃	砂部	1,500円
〃	東中	1,200円
郷土のおはなしとうた	3集	600円
加古川市誌第2巻(別府町)		5,000円
加古川市の文化財		1,500円